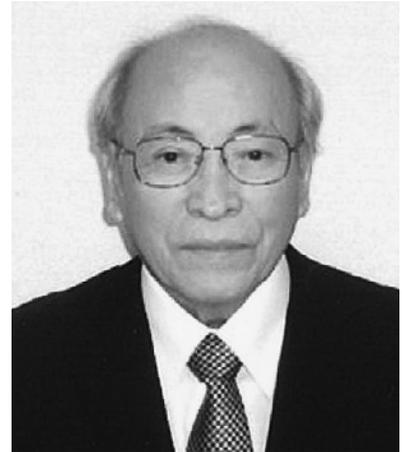


## 追悼 大久保康彦 先生

玉井 寛 (バイオシステム株式会社)

大久保康彦先生は、1930年9月3日東京都千代田区生まれ、2021年5月13日に逝去されました。享年90歳でした。東京のと真ん中で生まれ、幼少時を千代田区神田小川町、麴町で育ち、在学した番町小学校をこよなく愛していました。1954年慶應義塾大学大学院社会学研究科心理学専攻修了（修士）し、同年慶應義塾大学医学部精神神経科教室助手として社会人をスタートしました。1958年桜ヶ丘記念病院医局（心理）入職、1964年東京電力総合研修センター講師兼診療所臨床心理担当勤務（2005年まで）、1968年國學院大學栃木短期大學へ入職し、教授、初等教育学科長を経て40年間在職し、2008年に退職しました。この経歴から、先生が長年にわたり個人相談や学生の教育指導面に力を注ぎ、若い人への教育に生涯をかけたことが分かります。日本応用心理学会では、会員の拡大にも意を注ぎ、私自身も先生からの勧誘、推薦で会員になりました。学会活動にも長年に亘り尽力し、認定応用心理士委員や常任運営委員を経験されました。その間、歌舞伎学会会員などにも所属し歌舞伎研究で活躍されました。



大久保康彦 先生

先生のご専門は、教育臨床心理学及び青年期社会心理学でした。大学院修了後、臨床心理学の草創期に大学の精神神経科教室や病院医局の心理専門スタッフとして現場を経験しました。その後大学に移ってからも、40年間、学生教育に携わりつつ、東電研修センターでも青年心理の指導を並行して実践しました。こうした現場教育の体験をもとに、学会発表や論文作成、著作には、必ず体験の裏付けとなるデータを添付するのを心がけました。その一方、相談臨床場面では、クライアントの客観的データとして、心理テストを幅広く活用しました。文章完成法テスト（SCT）やロールシャッハテスト、内田クレペリン精神検査、課題統覚検査（TAT）などを活用し、対象者の理解の裏付けとしました。そうした姿勢は、臨床心理学者の大久保先生が基本としていて、私をはじめ後輩に優しく伝えたものです。

具体的には、「心理テストは実施者のためではなく受験者が主役です。検査結果は、結果をフィードバックして初めてやったことになります。」という考えでした。この姿勢は心理テストが、単なる実施者側の活用情報としてではなく、受験者にとっても有益で、役立つ情報であるかどうかを中心にしていたからです。

先生は心理テストの中で投影法テストに強く興味をいただいていた。そのため、従来のTATと異なる刺激画を用いて、新しい「課題統覚検査」の開発を試みた時期もありました。先生を中心に研究チームを発足させ、数年間にわたり試行錯誤を行い、学会で幾度か発表しました。会場の先生方のご意見やアドバイスも取り入れながら、あと一步の段階まで進めたこともありましたが、最後まで裏付けデータの正確性に執着する姿勢を持った先生でした。その結果、市販にまで至らず複雑な思いが、残ったことでしょう。

今一つの強い関心事は、幼少時の興味から生涯に渡って続いた歌舞伎鑑賞でした。小学校入学前の時期から母親に連れられて歌舞伎見物を始めたとのこと。これは晩年に至るまで続き、床に就く前の半年まで歌舞伎座に通ったとのこと。歌舞伎に対しては、観賞趣味の域を越え、我が国の各種の伝統芸能研究に強い

気持ちで取り組みました。その集大成の報告書が「若者の歌舞伎観」（そうよう 2000年6月）です。

この報告書にあるように、毎年繰り返し若者を対象にして、質問内容も工夫しながら調査を実施した。その原点は、日本人であるならば歌舞伎の物語、演劇は分かるのでは、という気持でした。しかし、現実には時代と共に演劇、芸能の演者は表現の工夫や進歩があり、他方、観客側も生活様式や価値観により変わっていくことで、普遍的なとらえられ方は薄らいでいきます。こうしたジレンマに向かって問いを出しながら研究を進めました。

歌舞伎研究に情熱とエネルギーを注いだのは、本著でも記されているように1983年（昭和58年）から1999年（平成11年）の17年間の学会発表からも見て取れます。大学生と高校生を対象に長きにわたる調査は他には類を見ないものでした。日本の伝統芸能である歌舞伎が、なぜ現代になって若者の心理と距離が出来てきたのか、という疑問を様々な角度から問いかけたものです。高校生や短期大学、大学生を対象に調査を重ねて、若者の歌舞伎に対する意識を探り、伝統芸能、特に歌舞伎の普及に一助をという気持ちで進めたものです。そのため、初めて歌舞伎に接したときの印象や各種の伝統芸能に関する若者の印象について、興味や関心の度合いを調べ、現在の様相を浮き彫りにした作業でした。

もう一つの趣味が、青年期に友達と熱心に聴き入ったジャズです。近所で同じ環境の友達とは、壮年期、老年期と生涯にわたって、ともにジャズに親しんだ仲間でした。先生の趣味の世界では、歌舞伎とジャズが融合して分け隔てなくあったといえます。また、長年教鞭をとった短期大学では、フォークソングサークルの顧問を引き受け、学生と一緒に毎週楽しい歌を合唱していたということです。夏休みなど時間が取れるときは、アメリカのジャズの聖地、ニューオリンズにも出向かれていたとのこと。その際、途中に立ち寄るニューヨークで滞在するホテルは、決まってヒルトン・ニューヨークホテルで宿泊し、自分流儀を通して歩んだという一面もあります。

学会活動の役割でも、認定応用心理士の拡大普及に務められた一人です。幅広い分野の研究者を対象に、専門家の活動領域の拡大を図って会員に呼び掛けたものです。心理学の研究者だけでなく、看護や介護領域の会員にも応用心理士資格を取得して、より積極的な活動が行える方向性を目指しました。こうした活動から、先生は2000年の第67回応用心理学学会大会時に学会への貢献も含めて名誉会員に推挙されました。

#### 主な著書

「教育心理学入門」（共著）サイエンス社	1978.4
「新臨床心理学入門」（共著）建帛社	1983.6
「教育心理学入門 臨床心理学アプローチ」（共著）サイエンス社	1989.2
「基礎乳児学・学童心理学」（共著）八千代出版	1989.4
「精神保健」（共著）八千代出版	1990.4
「若者の歌舞伎観」（単著）そうよう	2000.6